

信州コーナー

「一九三〇年代『教労運動』とその歌人たち―長野県『二・四事件』のひびき」

碓田のぼる著

昭和の戦前期、教員たちが結成した労働組合（教労）は、戦争に向かう時代の中で激しい弾圧の対象とされた。長野県では1933（昭和8）年、自由主義的な教員らが治安維持法違反容疑で一斉検挙される「二・四事件」が起きている。本書は、事件の被害者となり、歌人でもあった若き教員たちの足跡に光を当てた。

93歳の著者は、千曲市出身の元高校教員で石川啄木研究でも知られる歌人だ。戦後の組合運動の中で、元・教労



関係者に接する機会もあったという。

注目したのは、戦前、飯田下伊那地域の小学校で教員を務めた今村治郎と、その妻となる矢野口波子、同僚の福沢準一、奥田美穂ら。今村らは軍国主義教育に反する独自の「修身科・無産者児童教程」をまとめるなどして、検挙される。それぞれの人生を、残された短歌や手記から復元を試みた。

非転向を責めた矢野口には、生涯独身で亡くなった同志の元教員を悼んだ歌があるという。〈結婚さえ遂に奪いし治維法に怒り新たな烈日の墓前〉。不正義への憤りと悲しみが胸に迫る。

（本の泉社・1650円）